

【ターミナルケアで求められる訪問看護の役割】

生活、人生は意思決定の連続です。

誰もが何かを選んだり、選ばなかったり、迷って決められなかったり、選ぶのに、失敗したり、うまくいったりを繰り返しながら生活しています。

終末期の過程においては、全人的なケアを行う事はもちろんのこと、利用者様が死をどのように受け止めていくのか、これからどのように過ごしていきたいのかなど、意思決定支援に基づく関わりが重要となってきます。

それぞれに個々の価値観があり、本人や家族の思いも日々変化していくことがあります。ご利用者様やご家族の心の揺れに寄り添う事はとても難しいことであるが、その方のこれまで歩んでこられた人生物語をひもときながら、人格の尊重、意思の尊重をしようと努力する事は、関わる私たちにとっても大きな成長につながります。



看取りが近づいてくると「大切な人が自分の人生からいなくなってしまうかもしれない」と言う家族の予期せぬ不安があります。訪問看護師として関わる上で見通しがつくようにお手伝いすることが基本になります。

「だんだんとおしこの量や回数が減ってきます」「呼吸が荒くなってきたら、そろそろというサインです」などのように、1つずつその場でご家族へ説明し、ご家族がご家族らしく対応されるように見守ることが大切です。

私が看取り士の研修を受けた中で、印象に残っている事は、死を目の前にした人に関わる側の私たちの心のあり方、私たちの死生観、そして最も大切な学びとして「呼吸を合わせること（気持ちを合わせる）」を学びました。

でのひらでは、終末期のご利用者様にセラピストも関わり、看護師と協力しあえることで、その方の命の時間がより濃厚でかけがえのない時間になりますようにと願っています。

今、関わる目の前にいる方の世界を想像しながら、その気持ちに寄り添い、「隻手音声（せきしゅおんじょう）」の心を持ち、関わりたいですね。

看取りから学ぶこと、あるいは看取りでしか学び得ないことがあると私は確信しています。

猛暑の中、よく頑張ってくれた皆様に感謝いたします。今月もお疲れ様でした。

2024年 8月 9日

呉 静恵

